従つて右にのべた文学的性格――つまり形態・様式・形象など――の時代的特殊性の問題に接近することが出来ないからである。文学的性格の問題は文学の領域に属することかもしれないが、そのためには歴史家が精確な準備をしなければならないのである。

以上、はなはだ主観的な形で紹介と批判をのべたため、著者および読者に対しずいぶん御迷惑をかけたかと思う。殊に、幾年も前に書かれたものをとり上げて、今日の角度からかれこれこれ勝手な注文をつけたのはたしかに云いすぎであるが、しかし卒直にいつて本書が今日の問題意識からもあまりに生き生きとした内容をもつているので、敢て非礼をかえりみず後学の一人として自己のうけとり方をのべたまでである。この点著者の御寛恕をねがうことにし最後に日本文学の伝統を民衆の生活とともに理解しようとされる古典文学研究者と、文学史に接近しようとされる歴史家に、特に本書の一読をおすすめして、つたない書評をおえたいとおもう。（本文三九〇頁図版一六頁、索引三〇頁、定価六八〇円、東大出版会発行）

――黒田俊雄――

村瀬興雄著 ドイツ現代史

「現代史の研究上で私の一番解きにくい問題は、客観的な実証的研究と云うことではなく、それを宿命論に、陥らぬように叙述することです」……これは村瀬教授が、ここに紹介する著書の発刊に当つて、私に寄せられた言葉である。今日ドイツ・ファシズムに対する批判が、漸く多くの研究者の関心に上り、夫々の立場から、論争をも交えて、重要な問題が提出される状態になつた。しかし、すべての現代史研究にとつて共通する困難は、眼前に展開される同時代の諸事件が、余りにも生々しく我々の心に刻みつけられているために、却つて近視眼的な、冷静さを欠く判断に陥りやすいことである。これらの諸現象を如何に整序し解釈し過去の流れの中に統一的に編み込んで行くかということは、歴史学者に要請されている使命であろう。それは歴史的発展全体についての透徹したパースペクティヴを持つことによつて可能となることは更めていうまでもないことであろう。我が国の西洋史学界において、ドイツ革命とワイマール共和制を中心とする研究に、常に先達の位置に立つて来られた教授が、前述の言葉を漏らされたということは、長い研鑽の果に到達された心境を披瀝されたものとして、深い感銘を覚び醒まさずにはおかなかつた。

しかしながら、ドイツ現代史の解明は、現在なお根本的な資料が刊行されつつあるような状態であり、本格的な立論は、実は今から漸く開かれようとしているのであるから、教授のこの著書に、ただ全面的に完成された成果のみを期待することは、却つて教授の真意を誤解することになるのではないかと思う。むしろ我々は、本書の中に、ドイツ現代史に含まれている重要な問題点と、それについての現段階における諸外国の研究水準を汲み取ることに重点を置き、後学の我々がそれを踏み台にしてより多くのものを積み重ねる糧とする心構えで、本書に対することが肝心であるように思う。このような態度で通読するなら、本書は誠に貴重な教示を我々に提供している。殊に欧米学界の動向は、極く最近のものに至るまで、殆んど見落されることなく紹

介されており、着実な努力の跡がよく現れているように見受けられる（ただ古典的なものであるがチークルシュの文献に触れられていないことはいささか奇妙に感ぜられるのであるが）。以下紹介と若干の感想を述べて見たい。

はじめの二章は、第二帝制の政治的支柱をなすユンカーの、第一次大戦前における状態が概観されており、その特権、支配的地位の具体的な様相（中央及び地方行政機構内における中核的地位、参謀将校団、或いは日常生活を通じての相互の結合関係など）が述べられ、統一後のドイツの中に、封建制の残存勢力が強力な形で持ち込まれたことが、本書全体の大前提として説かれる。次いで第三・四章では、帝制の極めて複雑な国家機構（プロイセン王国の優越性とその絶対主義的支配）が、ユンカーの支配的地位の維持を志向するものであつたことを述べるとともに、それは帝国に於いて「最も民主的制度」である議会の機能を抑制することによつて遂行されたこと、従つて民主的改革は、プロイセン下院の三級選挙法改正と帝国の議会政治の要求に集中的に向けられることが具体的に示されている。ここで注目すべきことは、帝国の民主的改革は、プロイセンのユンカー的支配を切り崩し、それは帝国存立の根拠たるプロイセンの優越を覆すことになるという、帝制ドイツの政治構成の矛盾が、教授によつて強調されている点である。民主化の問題がかくも根本的な困難を伴つていたことを明確に指摘されたことは、ドイツ現代史研究にとつて非常に重要な原理的な問題であり、従来の帝国とプロイセンの関係を更に一歩明確に示されたことは大きな貢献であろう。

次いで教授は、このような民主的改革は、ブルジョアジーによつてではなく、社会民主主義者によつてのみ推進され得た点に、後進的なドイツの特徴を認めておられる。このことは教授のいわれる通りであるが、何故そのような民主化の道が、社会民主主義に負わされなければならなかつたかという点は、本書では充分な説明に接し得ないようである。それは教授が帝制の特徴として、封建遺制（ユンカー）に帝国の支柱の重点をかける叙述をされた関係上、ブルジョアジーの帝国における地位、役割（ドイツ資本主義の発展の性格）に言及し難かつたためであろう。事実教授も帝制下で「実権を握つていたのはユンカーでなくて、世界に覇を唱えたドイツ重工業資本家と金融資本家であつた」とさえ述べて、帝制の社会体制は資本主義であり、ユンカーもまた単なる封建的経済の基礎に立つているのではなく、市場生産を目的とし合理的計算に基づく農業経営者として資本主義への適合に努力し、近代社会の中に長く生き続けて来たことを繰返し指摘しておられる。従つて帝制下でブルジョアジーの占める社会的・政治的地位が、もつと明確に示されることが必要なのではなかつたろうか。このことは自明のことであるというならそれまでだが、教授のみならず、今日までの十九世紀ドイツ史研究で、具体的な立論の弱い点であるように思う。ドイツのブルジョアジーが自らの手で市民的支配秩序を国民的に形成し得なかつたことと、それにも拘らず前世紀後半にドイツ資本主義が急速に発展し、社会秩序の根幹になりつつあつたこととの関聯、或はこの関係を基礎として、更に、帝国主義段階に進むド

イツ資本主義が、封建遺制――ユンカー――と経済的に矛盾しながらも、やがてそれを調節克服しようと努力する過程の中から、両者のより反動的な結合が導き出されて来る問題など、そうした諸問題は今後我々に残された課題の一つであろう。この解明に裏づけられることによつて、社会民主主義がドイツの民主化――しかも社会主義的民主化ではなく、改良主義的なそれ――を推進し得る唯一の強力な勢力であつたことが、充分に納得されるのではなかろうか。この点は、中央党の性格を知る上にも重要である。この政党が我々にとつて甚だ理解し難いものであり、本書がその点を明かにしていることは有意義であるが、ただ蛇足を付加えるなら、西ドイツの中小土地所有者が、ユンカー等の大地主と利害を異にし、それが中央党左翼の性格を規定している点が指摘される必要があるのではないだろうか。このことは、ビスマルク以後にドイツ政府が益々独占資本の勢力に傾いて行くことを裏づけると共にドイツ民主化の性格を理解する上で左翼自由派の動向と関聯してやはり大切なことのように思われる。

更に社会民主党の革命に対する態度の問題であるが、当時正統派と修正派が共に社会主義をどのように理解していたかをもつと明確にすることが、今後に残された問題ではなかろうか。これは案外定式化されてしまつて自明のこととされているが、社会民主党――従つて第二インターナショナル――では、社会主義革命に対する実際的方策がなかつたのではないかと考えられる。現在ではロシア革命以来、社会主義政治のあり方が具体的に既に三十数年間経験されて来ているので、ソヴィエトの意義は充分知られているが、第二インターが、パリ・コンミューンや或はロシア第一次革命にどのような教訓を汲み取つていたか、従つて革命をどのように準備し、豫想し、画いていたかを知ることは、ドイツ社会民主党の市民的・日和見的性格を理解する点に必要な検討ではないだろうか。本書に於て、ビューローのブロック政策に関聯して、社会民主党がゼネ・ストを政治闘争の手段としてはじめて採用するに至る問題は、暗示するものが大きいといわねばならぬ。

第五章のドイツ革命は、教授が長年にわたつて積まれた蘊蓄を綜合されただけに、本書の中でも特に纒つた一章である。関係文献の紹介もよく整備され、以前の発表（西洋史学入門）に新刊が多く追加補充されている。殊に十一月革命に際しての指導者達の動向は、綿密な史料の吟味に基づいており、この研究領域での水準を示すものであろう。ただこの章だけでは、革命における資本家の動向がはつきりしない。また革命で変革された秩序の叙述が弱いのではないかと思う。ドイツ革命の市民的性格を政治勢力関係の面だけではなく、社会体制の面から追求して行く今後の研究に期待したい。やはり前章と同様資本主義の発展と結びついた問題であろう。

第六章のワイマール共和制の盛衰と、第七章のナチズムの発展、第三帝国の動向は、最も新しい研究分野で、多くの資料が刊行されているとはいえ、教授が言われるように、立論のための充分な基礎的吟味が未だ困難な段階にある。ただ教授の主張として、共和制の柱石が軍部（再編成された国防軍）にあつたこと、しかもそれは政治に対し合理的に対応する残存ユンカーの参謀将校団を頭脳にして

おり、それがナチの政権掌握にとつて却つて曲折した過程を辿らせたことが強調されている。これは優れた卓見である。従来共和制の理解は、ワイマール連合によつて代表されるブルジョア的支配体制に一般的に重点がおかれ、保守派がそれに対抗してナチを育成支援するに至つたと概説されている。従つて、軍部の中に生きのびるユンカーが共和制において占める役割を重視することは、古い見解に反省を喚起するものであろう。

更に最近の欧米学界の動向として、ブルジョア支配を可能ならしめたのは、国際的に、連合国がドイツのヴォルシェヴィキ化を恐れ、敗戦国ドイツに種々の反革命的処置を講じたとする見解を紹介され、またシュトレーゼマンの政策は、西欧とソヴィエトの間に介在して、その対立を利用する方策をとつており、単に西欧特にフランスとの協調のみに傾いていたものではなかつたことを述べておられる。これは何れも従来の通説の視野を広め、或は修正批判する新しい欧米学界の動向を伝えるものであり、甚だ興味深い問題であろう。それはドイツに対する欧米の融資などと関連して、今後外交史料の利用とともに更に深く究明さるべき問題である。

ナチの問題は覚書程度の叙述であり、この一章のみを以て批判することは出来ないが、ただ屢々理論的に言われているナチと金融資本との結びつきについて、ナチの党資金の出所などだけではなく、その政策、綱領、運動等における結合関係に何らかのヒントを与えて頂きたかつた。またナチの反革命的性格、デマゴーグの根拠についても今後教示されることを期待している。

以上不明を省みず勝手な紹介を述べたのであるが、教授が最近発表された論文を補訂され、新たに若干篇を加えて一冊にまとめられた本書は、後学の我々にとつて多くの示唆に富む問題を整序して提供されている。本書の出来上る間にも、ドイツ現代史は刻々と新たな見解や研究領域が開かれている訳であり、そのため論述の精粗や論理の不徹底さを感ぜしめる点がないでもない。種々の批判が出るとは思うが、しかしその多くは現代史を学ぶ者が等しく、負わされている責務であり、殊に根本的な資料がなお発表されつつある現状では、そのような批判は何よりも先ず我々自身の共通の課題である。これまで相当大胆な割切り方で有益な理論を提供した著作もあるが、しかしより広く史料を渉猟して、綜合的な把握を試みることが要請される歴史学にとつては、教授のように、着実に基礎的操作を続ける過程が立論の前提として必要であることはいうまでもない。史学者にとつては、退屈な、そして屢々酬われるところの少い廻り途が必要であり、素朴な意味で「自己に都合の悪いことも追求し説明しなければならぬ」のである。はじめに述べたように、我々は教授の今後の研鑽に実り豊かな成果を期待するとともに、我々自身本書を通して、教授の進まれた道を更に一歩前進せしめることに努力すべきであろう。

最後に、この紹介を記するに当り、村瀬教授から特に懇切な御忠告と教示を頂いたことを感謝するとともに、教授の真意を充分汲とれなかつたのではないかと懼れる次第である。（東京大学出版会刊・定価四五〇円）

——岡部健彦——